

# 村上春樹「ドライブ・マイ・カー」論

## ——視点の転換と偏りについて——

東 海 義 仁

### 1、はじめに

短編集『女のいない男たち』には六つの作品が収録されている。斎藤環はそれらに共通するテーマを「性愛の不条理」<sup>①</sup>という謎として捉え、清水良典はこの短編集が「セックスの介入によって理不尽に破壊される人間の弱さへの恐怖」<sup>②</sup>を想起する。

本稿では、この短編集の出発点<sup>③</sup>と作者自身に評される「ドライブ・マイ・カー」を中心に分析を行う。都甲幸治は、家福が乗るサーブは「そのまま妻の身体でもある」とした上で、みさがサーブに乗車できた理由について考察を深めるが、本稿ではサーブの中の座る位置によって視点が転換することを指摘するため、サーブ妻の身体であるという大枠には則らない。例えば、物語の冒頭で家福が女性ドライバーを二分類するのは運転席以外の席に乗ったとき（視点が転換しているとき）であり、この二分類が家福と高槻にも当てはまるものであることは語りの偏りを指摘するうえで重要である。山本千尋は家福の「生きる姿勢」に注目し、家福のブラインド

スポット（盲点）について指摘する。確かに家福は接触事故を機に、緑内障による自身のブラインドスポットに気づかされる。一方で、運転免許証が停止になった原因にはアルコールの検知も含まれており、その原因の大部分を緑内障によるブラインドスポットのせいであると考える家福の考え方には偏りがあるだろう。

また、本作品は男性サイドに偏った語りにより構成されており、女性サイドの視点が欠如している。加えて、中性的なみさきという人物にその語りを肯定させることで語りの偏りが隠蔽されていることも指摘する。家福が行う評価の枠組みに家福自身も含まれていることは、語りの偏りが隠蔽されることで気づきにくくなる。作品内に存在する要素で、これらとは異なる観点に着目して語りの偏りを指摘し、その効果についても考えたい。

### 2、強調的に女性性と結び付けられる「病のようなもの」

先行論で評される「不条理」や「理不尽」といった言葉に

共通して「どうしようもなさ」が挙げられているように、短編集の一番始めにあたる「ドライブ・マイ・カー」においても、語り手が焦点を置くことが多い家福の視点から一連の出来事の「どうしようもなさ」が語られる。この「どうしようもなさ」は、作中でみさが「病のようなもの」と言っているものである。

家福は、既に亡くなっている最愛の妻が生前に浮気をしていたことを把握しており、良好で周りから見ても理想的だった夫婦関係において何故妻が浮気をしなければならなかったかに悩まされる。そして、妻の死後も最愛の妻に自身の知らない部々があったことに囚われ続けている。本作品では、みさきという人物が一連の出来事を「病のようなもの」「考えてどうなるものでもありません」と言うことで、妻の浮気を「どうしようもなさ」いものであるように位置づけ、物語は唐突に結末を迎える。

家福と妻の出来事に関して言えば、妻に焦点が置かれることはないため、家福という男性サイドの考え方しか示されない。妻と死別した男が、最愛の妻が何故浮気をしたのかに悩まされながら、それに対して仮説を立てたり謎を解くために行動に移したりしながら、最終的にはみさきに語ることで記憶を再構成するという物語の構成が、家福側（男性サイド）に偏ったものであることは明らかだろう。

語り手が家福に焦点を置くことで、家福には非がないように語られる。仮に家福に非があったとしても、それは家福の

盲点であるために気付くことは困難である。家福は妻の浮気を知ることとその盲点が存在することを自覚しないわけにはいかないが、それを自身はどうにかできる範疇の外に位置付けるような偏った語りで物語は進行する。また、みさが「病のようなもの」と言ったことに沈黙を守ること、自身がどうにかできる範疇の外に妻の浮気の原因があることを否定しない。

みさが「病のようなもの」と言って指す「私の父が私たちを捨てていったのも、母親が私を」とん痛めつけたもの」には男性である父親と女性である母親の双方が含まれているのに、その直前に家福を沈黙させる台詞では「女の人にはそういうところがあるんです」と女性に限定されている。みさきは父親が自分たちを捨てたことからは男性性を見出さないが、家福の妻が浮気をしたことからは女性性を見出す。ここでは、家福が「病のようなもの」を受け入れるために女性性が暴力的に結び付けられており、しかもそれを提示する役割を担うのは女性であるみさきである。一方、家福はみさきの父親が家庭を捨てて出て行ったことに特に言及することはない。この対比は、本作品全体を通して一貫している部分であり、語り手が男性サイドに偏っているために、女性サイドから男性性を見出したり、それを「病のようなもの」に結び付けたりする視点は欠如する。

家福が女性ドライバーを二分類するのは、女性サイドの視点が欠如している典型的な例である。家福は女性ドライバー

に共通する要素として「緊張の気配」を挙げる。ここでは「緊張の気配」があるのは女性のみに当てはまる要素として取り上げられる。男性が異性である女性に性的な差異を感じることはあるにしても、同じように女性が男性に性的差異を感じることもあるだろう。しかし、家福は自身の性的立場に則り、女性ドライバーに女性性を見出しながら、逆の立場を考えることはしない。このように女性性が一方的に見出されているのは、語りが偏っているからである。

### 3、原因を取捨選択する家福

山本千尋は、家福の「知は無知に勝る」という信条や台詞の復唱という習慣などから、家福の生きる姿勢を「構造を知りたい、すべてを知りたい」という欲求、そして、知ることができるのだという欺瞞<sup>1</sup>」による二本柱であるとし、それが家福に盲点を作り出し、心に刺さったままの棘の原因であると主張する。確かに家福の生きる姿勢は、家福自身が苦しむ原因になっているだろう。

家福の盲点とは、接触事故を起こした時の検査で発覚した緑内障によるブラインドスポットのことでもあるが、最愛の妻にすら存在する自身が知らない部分のことでもある。この接触事故が理由でみさきという運転手を雇うことになり、運転席に座ることしかなかった家福が助手席に座ることで物理的に視点が転換される。そして、視点の転換は亡くなった妻のことを頻繁に考えさせるきっかけとなる。

家福の運転免許証が停止になった原因は、微量のアルコールと緑内障によるブラインドスポットであり、この二つは接触事故を起こしたことによって発覚する。この接触事故を理想の夫婦関係が継続不能であったことを意味する比喩であるとすれば、ここで発覚する二つのことは理想の夫婦関係が継続不能になった原因を示すものと考えられる。緑内障によるブラインドスポットは最愛の妻にすら存在する家福の知らない部分であり、それも確かに理想の夫婦関係を継続不能なものにした一つだろう。しかし、それと同じように微量のアルコールも原因の一つである。

アルコールは内々に収めることができる程度に微量でありながら確実に検知されたように、運転免許証が停止になった原因として除去しきることはできない。本作品が家福側（男性サイド）に偏った語りでありながら、家福にも過ちがあったことを示している点でこのアルコール検知の事実は重要である。これは夫婦間で具体的な問題にならないレベルにおいて、自分には非がなかったように語る家福にも何らかの過ちがあったことを示唆する比喩と解釈できる。また、この接触事故が起きていなければアルコールが検知されることはなかった。飲酒運転においては、本人が正常であるかどうかという状態の変化が問題になるわけではなく、一定以上のアルコールが検知されることそれ自体が問題になる。

家福は微量のアルコールが検知されたことを全く気にせず、ブラインドスポットを運転免許証が停止になった大きな

原因であるように語る。最愛の妻にすら存在する自身が知らない部分と重なるブラインドスポットを運転免許証停止の大きな原因とすることは、自身がどうにかできる範疇の外に妻が浮気をした原因を見出す家福の姿勢と一致するのではないだろうか。緑内障によるブラインドスポットがそれ単体で接触事故の原因になったわけではなくそこにアルコールが絡んでいたように、家福の妻が浮気をした(理想の夫婦関係が継続不能になった)のも、妻に家福の知らない部分が存在したことのみに原因となつたわけではなく、家福自身にも確実に過ちが存在したことを表す比喩として機能している。しかし、家福は自身の非を認めず、あるいは気付かないまま、妻が何故浮気をしたのかに悩まされ続けており、語りに偏りがあることで物語の構成的にも家福の過ちに目を向けられることはない。

#### 4、視点の転換と二分類

本作品では、普段は運転席に座る家福が助手席に乗ることで物理的な視点の転換が描かれる。同じ車であっても、運転席と助手席とでは見える景色は異なるだろう。家福は、みさきが運転する車に乗るようになってから亡くなった妻のことをよく思い出すようになるが、これはみさきが亡き妻との間にできた女の子と類似することだけが理由ではない。運転席という操縦する立場から助手席という静観する立場になることで、自然と運転席に座っている時には盲点となっていた部

分にも目を向けることができるようになったのである。

また、物語の冒頭では、家福が女性の運転する車に乗った体験が紹介されている。そこでは女性ドライバーを「いささか慎重すぎる」者と「いささか乱暴すぎる」者にと二分類してその特徴を述べているが、この二分類も女性が運転する(「家福は運転席ではないところに座る」)ことで、物理的な視点の転換があつた時になされたものである。家福は、普段の運転席からそれ以外の席に座ることで、普段とは異なる視点で物事を考えるのである。

そして、この女性ドライバーの二分類は高槻と家福に当てはめて考えることができる。「いささか慎重すぎる」女性ドライバー達が「それでもその運転ぶりは時として、周囲のドライバーを苛立たせるかもしれない」と評されるように、家福に「なんでもない男」と評される高槻も、その無害さそのものが家福を苛立たせる。妻が高槻に惹かれたことを侮辱的に感じられたのは、良くも悪くも無害である高槻という男だったからである。高槻が自分より優れている男だと思えるなら侮辱されたとは感じないだろう。「いささか乱暴すぎる」女性ドライバー達が「自分の運転は上手だ」と信じているように見えると評されるように、家福も自分たちの夫婦関係が良好で理想的なものであつたと信じている。もちろん、実際には「いささか乱暴すぎる」女性ドライバー達も家福と妻の夫婦関係も良好なものではない。「いささか乱暴すぎる」女性ドライバーが、実際は周囲のドライバーにため息をつかれ

ていることに気づいていないことは、自身に何らかの過ちがありながらもそれに気づくことができず、妻を浮気させてしまった家福の姿と重なる。また、家福は高槻に「何かひどい目にあわせてやろうと思っていた」が、高槻は浮気をしながらもその夫婦関係を壊そうとはしない。相手に害を与えない高槻は無害であり、害を与えようとした家福は有害であるという点で、二分類される女性ドライバーと一致する要素に加算できるだろう。

しかし、家福は自身と高槻がその二分類に当てはまることに気づかず、女性ドライバーを二分類するのみである。家福が女性ドライバーを二分類するのは普段とは異なる視点で物事を考えている時であり、自分達夫婦関係においては視点を移動させて考えることができない。高槻の、異性のすべてを理解することが不可能であるという旨の意見を「でもそれはあくまで一般論だ」と切り捨てて様子には、家福が視点を移動して自分たちの問題を考えられていないことが表れている。一般論として物事を考えることは、自らが置かれている立場を客観視する際に有効な手段になるが、家福はそれを拒絶し、自身の問題を女性ドライバー達を二分類した時のように分析することはない。

このような家福の様子は、自らやその夫婦関係に傲慢であるとも言えるし、自らの過ちに気付く機会を無意識に避けているとも言える。いずれにせよ、家福の考え方は自己を正当化する方向に偏っており、同時に語りも家福側（男性サイド）

に偏っている。

そして、無害である高槻は家福のその切り捨てさえも「そのとおりです」と受け入れるのみであり、妻が既に亡くなっている家福はいつまでも自身の過ちに気付けない。物語としても女性側の視点が欠如しているために、救いがないように描かれるのである。妻側（女性サイド）の考え方が提示されたとしても解決しない問題はもちろん存在するが、偏った考え方のみでは知りえない考えを持てた可能性は高まるだろう。また、女性サイドの語りが含まれれば、家福の考え方が偏っていることそれ自体を露見できていた可能性も高まる。

##### 5、みさきによって唐突に終わらされる物語

家福と妻の間に出来た「三日だけ生きていた」子供がそのまま生きていれば同じ年齢であるみさきという人物は、女性でありながらも中性的に描かれる。都甲氏は「化粧をすることもなく、美しさを持たないみさきは、村上世界では女性ではない。しかし大きな乳房を持つがゆえに男性でもありえないのだ」と中性的であることを指摘し、清水良典はみさきのいう「病のようなもの」が「女性に対する一種の偏見のような観念」であり、それが「愛する女が自分の専用物にならないければ許せない」という男性側のマツチヨな固定観念の裏返しであることを指摘する。乳房の大きさだけでなく「太ってはいないが、肩幅は広く、体格はがっしりしている」体型や「男物のヘリンボーンのジャケットを着て」いることから

も、みさきは女性でありながら男性的な要素を取り入れた中性的な人物として描かれていると言えるだろう。

清水氏が指摘するように、本作品では「女性に対する一種の偏見」<sup>⑧</sup>を、中性的な人物であるみさきに言わせている。これにより、語り手が焦点を置く家福にとって都合のいい男性的な觀念が、中立な見解として提示されるようになる。中性的な人物として描かれるみさきだからこそ説得力が増すのである。

また、物語の結末部では、「病のようなもの」であることと演技をすることがスムーズに結びつけられる。しかし、家福自身が述べているように、演技をすることは容易いことではない。「病のようなもの」とは「どうしようもなさ」という短編集全体の共通項に位置づけられるものであり、その「どうしようもなさ」を受け入れるために演技をするという。家福は妻が浮気をしていた時に、その事実を把握していることを妻に悟られないように演技を貫き通した。それは「妻が他の男の腕に抱かれている様子を想像する」「ことにも増して辛い」ことであると述べている。そんなにも辛い演技を続ける理由はいったい何なのだろうか。

家福が言うような理想的な夫婦関係なら、妻が浮気をしていると知った時点でその問題を解決するために話し合うことは可能だったはずだが、それを行動に移すことはない。問題を解決しようと試みるどころか、辛くて仕方がない演技をする方を選ぶのである。

ここでは、家福が問題解決を試みようとしなかったことそれ自体が問題である。家福が辛い演技を続けていたのは、妻に自身が知らない部分があったことを認めたくなかったからではないだろうか。「知は無知に勝る」という考え方を家福にとって、最愛の妻に自身の知らない部分が存在していたということは、受け入れがたい事実なのである。そして、その事実を受け入れることは、露見するであろう自身の過ちを認めることにもなる。家福は飲酒運転という過ちを運転免許証停止の重要な理由としては捉えないように、自身の過ちが妻の浮気の原因であることを認めるのを無意識に避けている。もしくは、全く自身に問題がないと傲慢な考え方をしてしまっている。

本作品の結末部で、中性的なみさきによって「病のようなもの」が提示され、演技をすることとスムーズに結びつくことで、家福にとって都合の良い結論に落ち着くよう効果的に機能している。

## 6、まとめ

本作品では、女性性が強制的に「病のようなもの」と結び付けられていたり、男性が女性を評価することはあってもその逆がない。これらは語りが男性サイドに偏ったものであるからであり、同時に家福の偏った考え方を隠蔽してしまう。運転免許証停止の原因を取捨選択しているように、家福は確

実に偏った考え方をしている。偏った考え方をみさきに肯定させることは、その偏りや家福の自己正当化を手助けしている。

- (1) 斎藤環「性愛の内と外」(文学界二〇一四・六)二  
三六頁。

- (2) 清水良則「その奥に秘められし力を見出すべし」(文  
学界二〇一四・六)二三三頁。

- (3) 『女のいない男たち』の「まえがき」で村上春樹は  
「本書のモチーフはタイトル通り『女のいない男たち』  
だ。最初の一作(『ドライブ・マイ・カー』)を書いて  
いるあいだから、この言葉は僕の頭になぜかひっか  
かっていた。何かの曲のメロディが妙に頭を離れない  
ということがあるが、それと同じように、そのフレー  
ズは僕の頭を離れなかった。そしてその短編を書き終  
えたときには、この言葉をひとつの柱として、その柱  
を囲むようなかたちで、一連の短編小説を書いてみた  
いという気持ちになっていた。そういう意味では『ド  
ライブ・マイ・カー』がこの本の出発点になった。」  
と記している。

- (4) 山本千尋「村上春樹『ドライブ・マイ・カー』論  
——「生きる姿勢」、家福の盲点を生み出すもの——」(立  
教大学日本文学二〇一七・一)一三三頁。

- (5) 前掲「妻の裏切り」二四一頁。都甲氏はみさきが中

性的であることに加え、彼女が生者と死者の境界線上  
であることを指摘するが、本稿では中性的であるとい  
うこと以上は見出さない。

- (6) 前掲「その奥に秘められし力を見出すべし」二三三  
頁。

- (7) 注6に同じ。

- (8) 前掲「その奥に秘められし力を見出すべし」二三三  
頁では、「しかし本当の問題は、けつして愛の深さや  
真偽ではない。男女間の愛にセックスというものが混  
入したとたんに生じる『暗がり』のような領域、『奥  
に秘められし力』なのだ。」と論が続くため、正確に  
は清水氏の主張はこれを問題にはしない。

(とうかい・よしひと 富山大学大学院生)